

「笑顔のカタチ」

沖原佳世

登場人物

水野達哉（17） 高校2年生
阿部奈央（17） 依頼人の娘・高校2年生
阿部まり亜（82） 奈央の祖母
水野翔太（6） 水野の弟・異父兄弟
水野葉子（43） 水野と翔太の母
阿部弓江（49） 依頼人・奈央の母
阿部浩一（52） 依頼人・奈央の父
山口公平（17） 水野の友人
小学生1
小学生2
小学生3
店長
友人
教師

○栄南高校・廊下・教室前

「2―3」のプレートが上がっている。
ざわついた生徒たちの声。

教師の声「おい静かに！」

○同・教室・中

男女の生徒が席に座っている。

水野達哉（㊦）が窓側の後ろの席につき、外を見つめている。

教師「いいか？夏休みにアルバイトするものは申請書と承諾書、明日の終業式までに持ってくること！」

教師、申請書と承諾書を掲げる。

教師「以上、解散」

生徒たち、騒がしくなる。

水野、鞆を持って席を立つ。

山口公平（㊦）がやってくる。

山口「ド短期！高収入！学歴不問！」

水野、山口を一瞥し無視して歩き出す。

山口「おい、ちょっと待てよ」

山口、水野を慌てて追いかける。

○同・廊下

水野、山口を無視し、歩きつづける。

山口「なあ、水野。頼むよ」

水野「他あたれよ」

山口、水野の前に立ちほだかり、

山口「無理なんだよ。水野にしかできない！」

水野「山口の幹旋してるバイトはロクなのな

いって噂」

山口「(凶星) いや、そんな噂ないって」

女子生徒、すれ違いざまに、

女子生徒「山口、この前のバイト、サイテー」

山口「へ？」

山口、女子生徒に捕まる。

○同・階段・踊り場

水野、階段を下りる。

山口、階段上で女子生徒に詰め寄られている。

山口、おりて行く水野に、

山口「気が変わったらすぐ言ってくれ〜」

水野、知らんふりで歩いていく。

○水野のアパートの部屋・居間・中

2DKの間取り。

台所を挟んで2部屋。

ひと部屋は開け放して居間、一方の襖は閉まってる。

水野翔太（6）が一人古いゲーム機で遊んでいる。

途中で画面が消えるゲーム機。

翔太、振ったり、叩いたりする。

また画面が付き、ゲームを始める翔太。

水野、スーパ一の袋を持ち入ってくる。

翔太、笑顔で駆け寄ってくる。

翔太「兄ちゃん、お帰り！」

水野、翔太の頭に手を置き、

水野「ただいま、翔太」

水野、翔太の手に持っているゲーム機

を見て、

水野「またゲームやってたのか？」

翔太「ちよつとだけ。なあ、兄ちゃん、あさ
ってから夏休み……」

水野「一緒に遊ぼうな」

翔太、満面の笑みで、

翔太「うん！」

水野「腹減っただろ。ご飯作るから、翔太は
部屋の片づけ」

翔太「わかった。あ、母ちゃん寝てるよ」

翔太、居間兼寝室にしてある六畳間を
片づけ始める。

水野、閉まっている部屋の襖を開ける。

○同・葉子の部屋・中

水野、入口に立つ。

脱いだ女物の服が散乱している。

水野葉子（あは）派手な化粧をしたまま
寝ている。

水野、付けっ放しのテレビをリモコン

で消す。

リモコンを寝ている葉子の足元に投げつける。

布団に当たるが、葉子は気がつかない。

水野「……ババア」

水野、乱暴に襖を閉める。

○栄南高校・教室・中（朝）

水野、窓の外を見ている。

山口やってきて、

山口「気イ変わった？」

水野「全く」

山口「お前さあ、じゃあ、この夏何やって過
ごすわけ？」

水野「子育て」

水野、出ていく。

山口、呆気にとられる。

○ひばり公園・中

翔太が3人の小学生に囲まれている。

翔太、ゲーム機を取り上げられる。

小学生1「かっこわりー」

小学生2「何これ古〜っ！化石じゃねーの？」

小学生3「化石は埋めちゃおうぜ」

翔太「やめてよ、やめて！」

翔太、小学生らに突き飛ばされる。

○ひばり公園・前

友人と下校途中の阿部奈央（ニ）。

公園内の翔太たちに気づく。

奈央「ちよつとあんたたち！何やってんの！」

友人「えっ？」

奈央「先に行行って！」

奈央、公園内に走り出す。

友人「ちよつと！奈央ッ！」

小学生3人は走って逃げる。

翔太、ポカンとする。

友人は、あ然として見ている。

○ひばり公園・中

奈央、砂場の横に座り込み、ゲーム機を掘り出す。

翔太、立ちつくす。

砂まみれのゲーム機。

奈央「壊れちゃったかなあ」

翔太、走り去る。

奈央「あつ、君っ！」

奈央、ゲーム機を持ち、困った表情。

○スーパー「サトー」・表

制服姿の水野、入っていく。

○中古ゲーム屋「ドラゴン」・店内

ゲーム機が並んでいる店内。

不愛想な店主がレジを打っている。

翔太、高い位置にある最新のゲーム機

につま先立ちで手を伸ばす。

○水野のアパート・葉子の部屋・中

葉子、念入りにマスカラを塗っている。

携帯が鳴る。

一度振り返るが無視して、マスカラを塗り続ける。

○スーパー「サトー」・店内

水野、制服姿で、買った食材を袋に詰めている。

携帯電話が鳴る。

登録されていない番号。

怪訝な表情で無視すると切れる。

が、また呼出音。

水野、仕方なく出る。

水野「……もしもし？」

○中古ゲーム屋「ドラゴン」・店内

水野、スーパーの袋と鞆を抱え、走り込んで来る。

事務所のプレートを見つけ、ノックし、ドアを開ける。

○同・事務所・中

息を切らした水野が入ってくる。

翔太、店長の男の前で椅子に座っている。

机の上には最新のゲーム機とソフト。

翔太「……兄ちゃん」

水野「水野です、あの、万引きって、何かの間違いじゃ」

翔太、唇をかみしめる。

水野「翔太……」

店長、ゲーム機を触りながら、

店長「あくあ、これ、壊れちゃってるよ」

水野、頭を下げる。

水野「すみませんでした」

店長「うちはお客に子供が多いから、あんまり警察沙汰にはしたくないんだよねえ。わかる？」

水野「買い取らせて頂きます」

店長「全部で1万8千円ね」

水野、財布を開ける。

水野「……」

水野の財布の中身は3千円と小銭。

水野「すみません、今、手持ちが……。分割
じゃだめでしょうか」

水野、もう一度頭を下げる。

店長、あきれ顔で、

店長「分割って。（声を荒らげる）まいった
よねえ、買い取りもしてもらえないんじゃないか」

水野「……」

店長「大体、こういう時に親も来ないって困
るんだよ。この子に聞いた携帯に連絡して
もつながらないしさあ。お兄さん、高校生
だろ？」

水野、頭を下げ続ける。

翔太、泣きそうな顔でじっと見つめる。

水野「親……いないんです」

翔太、店長「えっ？」という表情。

水野「だからその番号、もし出ても、他の人
だと思いません」

店長「そ、そうなの？」

店長、気の毒そうになる。

店長「まあ、それじゃ、仕方ないって事もないけど……。お兄さん、君も大変だねえ」

翔太、水野を見つめる。

水野、頭を下げ続ける。

○土手（夕）

水野、スーパーの袋と鞆を持ち歩いて
いる。

少し遅れて歩く翔太。

水野「兄ちゃんのゲーム機、なくしちゃった
のか……」

翔太、立ち止まる。

水野、振りかえり立ち止まる。

翔太「なんで？」

水野「ん？」

翔太「なんで、母ちゃんいるのに、いないっ
ていったの？」

水野「……翔太は、母ちゃんに来てほしかっ
たのか？」

翔太、うつむいて首を横に振る。

水野「じゃあ、いないってことにしといていいじゃん」

翔太「兄ちゃん、違うんだ。新しいゲームちよつとだけ見てみたくなって、そうしたら落つことしちやつて。ごめん……ごめんなさい」

翔太、泣きじやくり始める。

水野、翔太の背に合わせるようにしやがんで、翔太の頭をくしゃくしゃに撫でる。

水野「悪いと思ったことは、二度とすんな」

○山口の家・玄関・中（夜）

水野が立っている。

奥から、山口やつてくる。

山口「（驚いて）うそっ！」

水野、ばつが悪そうな表情。

○同・山口の部屋・中（夜）

水野、居心地悪そうに座っている。

山口、PCをセットしながら、

山口「何かあったのか？急に金いるとか…

お前、子育てって、まさか（妊娠）」

山口、お腹が大きいように手で示す。

水野「ちげーよ」

PCに映し出された画像には、黒髪で

短髪の水野にそっくりな阿部明弘（20）

の姿がある。

驚く水野を見て、山口、嬉しそうに、

山口「超そっくりだろ。骨格似てるから、声

もすげー似てるし」

水野「これ」

山口「彼のふりをしてもらおう。それがバイト」

水野「え？」

山口は机の上のファイルを持ってきて

説明し始める。

山口「『阿部明弘』は大阪に住む大学生。し

かし、半年前に交通事故で死亡。杉並区の

実家には心臓の弱いばあさんが同居。今度

ばあさんに発作が起きれば命が危ない。阿部家はばあさんに彼の死を告げないことに決めた」

水野「そんなの、いつかはバレるだろ」

山口「はい、そこ、ポイント！孫に扮した君は、果てしないアメリカ留学へ旅立つ」

水野「果てしない？帰国は？」

山口「さて十年後か二十年後か。つまり、出発前夜、旅立つ君は大好きなばあさんに」

水野「永遠の別れを……告げる？」

山口「その通り！」

水野「その家族、おかしくね？」

山口「おかしいか、おかしくないかなんてそれぞれそれぞれの家庭の事情ってやつ」

水野「お前のバイトネットワークには呆れるわ」

山口「まあ、やると決まったからにはまず、その頭だな」

山口、ハサミを持つ。

水野「はあ？！」

山口「大丈夫。俺の母ちゃん、中学まで俺の髪切ってたから」

水野「俺はまだやるって言ってないだろ！」

山口、水野をはがいじめにする。

水野「やめろよっ！！」

水野、抵抗する。

山口、部屋の外に聞こえるように、

山口「おい、母ちゃん！！」

水野「やめろって！」

山口、抵抗する水野を押さえつける。

○喫茶店「ナチュラル」・店内

黒髪で清潔な短髪の水野と、山口。

その前に阿部浩一（52）と阿部弓江

（56）が座っている。

阿部、弓江、水野の顔をじっと見つめ、

弓江「……信じられない」

山口「名前は、水野達哉くんです」

阿部「失礼なお願いだとは充分わかっていまず。でもどうか、宜しく願いします」

阿部と弓江、頭を下げる。

阿部「あと、少し事情が変わりました」

水野・山口「？」

弓江「おばあちゃん、2週間後に病院併設の

ホームに入居が決まったんです」

阿部「2日間のお願いでしたが、2週間に延

長して頂けませんでしょうか？もちろん代

金はお支払します」

水野「延長っ？」

山口「ああ、大丈夫ですよ」

水野「（小声で）おいつ！」

阿部・弓江「（頭を下げて）ありがとうございます

います！」

山口「こいつ愛想ないんで、お安くしておき

ます」

阿部と弓江、微笑んで安心した表情。

水野「……」

○水野のアパート・台所（夕）

水野、玉ねぎの皮をむいている。

横には、阿部明弘データと書かれたレポートの紙が置いてある。

水野、横目で見ながら料理する。

紙に「祖母・まり亜」とある。

水野「ばあさんで、まり亜……キラキラかよ」
派手な化粧と格好をした葉子が襖を開けて出てくる。

葉子「じゃ、お店出てくるから」

水野、知らんふり。

葉子、水野の髪型を見て笑う。

葉子「ちよつと、何、その頭。彼女の趣味？」

水野「……」

玄関の開く音がし、翔太入ってくる。

翔太「あ、母ちゃん、行ってらっしゃい」

葉子「行って来るね」

洋子、出ていく。

翔太、水野の横に立つ。

翔太「……兄ちゃんは化石ってどう思う？」

水野「化石？化石ってのは……、歴史が詰まってる、価値があるものってとこかな」

翔太「えっ？ほんと？！」

水野「？」

水野、手を止め、

水野「翔太、兄ちゃん、明日からバイトなんだ。ご飯作っておくし、夜には帰ってくる。

夕方から少し一人になるけど、ちゃんと留守番できるか？」

翔太「……出来るよ。大丈夫」

水野「頼むぞ」

翔太、居間の片づけをしはじめる。

水野、翔太を見つめる。

○阿部家・外観

一軒家。「阿部」の表札。

○阿部家・リビング・中

タテ型のピアノがある。

奈央が、ソファに座り、ゲーム機をタオルに包み、絵筆で砂を落としている。

奈央、スイッチを入れる。

起動するゲーム機。

奈央「やった」

奈央、きれいになったゲーム機を鞆に
しまう。

弓江の声「ただいま」

奈央「おかえりなさい」

水野、弓江と共に入ってくる。

奈央、立ち上がるが、水野を見てギョ
ツとした顔で思わずよろける。

弓江「（奈央に小声で）驚いたでしょ。家の
事色々教えてあげてね。（水野に向かっ
て）明弘の妹の奈央です」

水野「……ども」

奈央「……おばあちゃん、今……眠ってる」

弓江「じゃ、先に2階に。お母さん冷たいも
の用意しておくから、奈央、お願い」

奈央「えっ?! あたし?」

弓江、キッチンに向かう。

奈央、嫌そうな表情。

水野は居心地悪そう。

○同・2階・廊下

奈央と水野が階段を上がってくる。

ドアが2つと襖の戸が1つある。

奈央、奥のドアを指さし、

奈央「あそこは（奈央の部屋）絶対に入らないで」

水野「入ったら？」

奈央「命の保証ないから」

奈央、襖の戸を開ける。

明弘の遺影と位牌が花に囲まれている。

水野「……」

奈央、振り返り手前のドアを開ける。

○同・明弘の部屋・中

奈央と水野、入ってくる。

ベッドや本棚、机がある。

奈央「（厭味っぽく）そのままになってるの。気持ち悪いなら、別にこの部屋で過ごさなくていいけど」

水野、部屋を見回す。

水野「お前は反対なんだな、ばあさんに黙ってること。でも、言いだす勇氣もない」

奈央、水野を睨みつけて、

奈央「私は『お前』じゃなくて奈央。おばあちゃんは『ばあさん』じゃなくて『おばあちゃん』。そんなこともわかってないあんたに、お兄ちゃんの代わりなんて、絶対にできない」

奈央、部屋を出ていく。

水野「俺のことは『お兄ちゃん』じゃなくて『あんだ』かよ」

水野、本箱の物理学の本を手取る。
開いてみるが、うんざりして元に戻す。
その横に、DVDを見つける。

『サッカー・試合』とある。

床に転がるまだ新しいサッカーボール。
水野、DVDをデッキにセットする。

映し出される映像。

友人たちと肩を組む笑顔の明弘の姿。

明弘「俺はこの試合で2ゴールは決めまゝす」

盛り上がる友人たちの姿。

ノックの音。

水野、慌ててDVDを止めドアを開ける。

奈央が立っている。

奈央「『おばあちゃん』……起きたって」

水野、緊張した顔になる。

○同・まり亜の部屋・中

阿部まり亜(88)は弓江に介助して

もらいベッドの上で上半身を起こす。

奈央と水野、入ってくる。

まり亜「(微笑んで)明弘、久しぶり。元気

だったかい？」

水野「……あ、はい。おばあさん、ちゃん！」

奈央、水野を睨む。

まり亜「……少し、痩せたかい？」

水野「そ、そうかな」

弓江、とりつくろうように、

弓江「大阪で一人暮らしじゃ、食事が不規則

になつてるんじゃないかしら。たくさん食べさせて元気にアメリカに送り出さなくっちゃね」

まり亜「留学行ったら、もう会えなくなっちゃうかもしれないね……」

奈央「何言ってるのおばあちゃん、アメリカなんて近いもんだよ。それに、あたしはずっとここにいるから」

水野、まり亜の微笑みを見つめる。

まり亜「明弘……顔をよく見せておくれ」

水野「あ、は、はい」

弓江、奈央、戸惑う。

水野、まり亜に近づいて顔を見せる。

まり亜、水野の顔を手で包み、じっと見つめ、話す。

まり亜「帰ってきてくれて……ありがとう」

水野「う、うん」

○同・リビング・中

弓江、奈央、水野、入ってくる。

ケーキが用意されている。

弓江「どうぞ、座って」

弓江、入れかけた飲み物を用意する。

奈央「あたしはいい、もう夏期講習行かないと」

奈央、出ていく途中で水野に呟く。

奈央「大根役者」

奈央、出ていく。

水野、ため息をつく。

○同・明弘の部屋・中（夕）

水野、ベッドで眠ってしまっている。

窓から差し込む夕日が眩しく、目を覚ます。

水野「こんなんで、金もらっていいのかよ」

○ひばり公園前（夕）

自転車で走る奈央、公園の中を見る。

砂場を掘っている翔太の姿。

奈央、自転車を止め、

奈央「あ、見つけた」

○ひばり公園・中（夕）

翔太、砂場のあちこちを掘っている。

奈央の声「探し物はコレかな？」

翔太、振り向くと、奈央が翔太のゲーム機を持って立っている。

翔太「あっ！お姉ちゃん」

○同・ジャングルジム・上（夕）

奈央とゲーム機を持った翔太がジャングルジムの上に座っている。

奈央「化石は歴史が詰まってて価値があるものか。翔太くんのお兄ちゃん、いいお兄ちゃんだね」

翔太「うん、すげーかっこいいんだ」

奈央「お兄ちゃんとは遊ばないの？」

翔太「バイトあるから」

奈央「バイトっ？」

翔太「うん、前は新聞配達してたよ」

奈央「お兄ちゃん、いくつなの？」

翔太「17歳」

奈央「年離れてるんだ」

翔太「兄ちゃんと、俺の父ちゃんは違うから」

奈央「えっ？」

翔太「母ちゃんが最初に結婚したのが兄ちゃんの父ちゃん。俺の父ちゃんは次の父ちゃん。2人ともどっか行っちゃったんだって」

奈央「あ……そうなんだ……」

翔太「だから、似てないんだ、兄ちゃんと」

気まぜくなる奈央。

奈央「でもね、似てくるわよ、一緒に住んでると！ほら、犬だって飼い主に似てくるんだから。だから、きつとカツコよくなれるよ、お兄ちゃんみたいに！」

翔太「ほんと？！」

奈央「うん！」

翔太、ゲーム機の電源を入れる。

翔太「あ、動いた！ありがとう」

奈央、微笑む。

○阿部家・ダイニング・中（夜）

水野、席に座り、驚いている。

弓江と奈央が、たくさんの料理を食卓に並べている。

阿部が、まり亜を車椅子に乗せて席に着かせる。

まり亜「今日は随分ご馳走だね」

阿部「明弘の帰省祝いだからね、母さんもたくさん食べなきゃな」

奈央と弓江も席に着く。

阿部「じゃ……おかえり明弘」

水野「ただいま、父さん、母さん、おばあち

ゃん……奈……奈……」

奈央、咳払いして、

奈央「いったただつきまーす」

奈央、料理を食べはじめ、水野以外は食べ始める。

水野、なかなか手を付けられない。

まり亜「明弘、食べないのかい？」

心配そうに見つめる阿部家の人々。

水野の携帯がなる。

着信画面に「山口公平」とある。

水野、慌てて立つ。

水野「ごめん、俺、約束あったんだ」

水野、急いで出ていく。

まり亜、弓江、阿部、呆気にとられる。

奈央、黙々と食べ続ける。

○ひばり公園・中（夜）

水野と山口、ブランコに座っている。

山口「17にもなって、他人とご飯食べるのに緊張するかねえ。俺は幹旋者としてちょっと様子を聞こうと思ったただだったんだぜ」

水野「初めてなんだよ、あういう雰囲気。家族団らんっていうの？どうやって食べばいいのか。それに、俺だけあんな……食べねえよ」

山口「……弟か」

水野、ブランコから降り、

水野「今日は助かった。ほんと、助かった。
俺、翔太待たせてるから帰るわ」

水野、走って行く。

○水野のアパート・居間・中（夜）

水野と翔太、オムライスを食べている。

水野、翔太の唇の端にケチャップが付
いているのを拭ってやる。

水野の口の端にもついている。

翔太「兄ちゃんも！」

水野「え？」

翔太、水野の口元を笑って拭く。

翔太「兄ちゃんと俺、似てきたね。犬も飼い
主に似てくるんだって」

水野「（鼻で笑って）何だよそれ。俺ら犬で
も飼い主でもないだろ」

翔太、幸せそうに笑って食べる。

翔太「あ！」

と思い出して、ゲーム機を見せる。

翔太「ジャーン！」

水野「えっ?!」

○阿部家・リビング・中（朝）

水野がソファに座っている。

奈央、入ってくる。

奈央「あれ、お兄ちゃんは朝帰りですか？」

水野「昨日は…悪かった」

奈央「別に期待してないし」

水野「そんな憎まれ口叩く妹をみて、兄さん

あの世で泣いてんじゃね？」

奈央、水野の頬を打つ振りをしながら、

よけた水野の脇腹をくすぐる。

水野、不意を打たれ、身をよじる。

奈央、勝ち誇った顔で出て行く。

水野「なんだよアイツ」

○散歩道

水野と奈央木漏れ日の中を、車いすの

まり壺を押して歩く。

奈央がこっそりと水野に道を指示して

いる。

ヒマワリがきれいに咲いている小さな

畑がある。

まり亜「今年も綺麗に咲いてるね」

奈央「ほんとだね」

まり亜「来年も一緒に見られるといいねえ」

水野「う、うん」

水野、奈央、複雑な表情。

まり亜、遠くを見つめている。

○阿部家・食卓（夜）

阿部家全員と水野が食卓についている。

水野、ぎこちなく食事を共にする。

まり亜「明弘、後でピアノ弾いてくれるかい

？」

水野「ピアノ？！」

阿部と弓江、困惑の表情。

奈央「おばあちゃん、ピアノならあたしが弾

くよ」

まり亜「明弘はアメリカ、あたしはホーム。

明弘のピアノをもう一度聴いておきたいんだよ」

奈央「……そうだね、じゃあ、おばあちゃんが眠るころに。ね、お兄ちゃん、後で弾いてあげて」

水野「……もちろん」

阿部と弓江戸惑いの表情。

○同・まり亜の部屋・中（夜）

まり亜、ベッドで横になっている。
穏やかな表情。

○同・リビング・中（夜）

奈央、ピアノの前に座る。

水野、阿部、弓江はソファに座っている。

水野「すみません」

阿部「こちらこそ、悪かったね」

奈央、「アベマリア」を弾き始める。

○同・まり亜の部屋・中（夜）

まり亜、流れてくるピアノを聴いている。

聴き入っている表情が、ふと曇る。

○同・2階・明弘の部屋・中（夜）

水野、ベッドに腰掛けている。

奈央、入口に立っている。

奈央「だからあんたにお兄ちゃんの代わりに
んて出来ないって言ったでしょ」

水野「さっきの曲、何て曲？」

奈央「アベマリア」

水野「……阿部まり……亜！って名前じゃん」

奈央「冗談でもおばあちゃんに弾いて聴かせ

ようなんてことしないでね」

水野「弾かねえよっていうか、弾けねえし」

○同・リビング・中（夜）

壁の時計8時半過ぎを差している。

水野、帰り支度をしてくる。

水野「じゃあ、今日はこれで」

弓江、水野に紙袋を渡す。

弓江「おかず、持って帰って」

水野「えっ？」

弓江「ごめんね。弟さんのこと、山口くんに

聞いたの。遠慮なんてしないでね。こっち

こそ、こんなこと頼んでるんだから」

水野「……ありがとうございます」

水野、受け取る。

弓江「うん」

弓江、嬉しそうに微笑む。

水野、素直な笑顔をかえせない。

○本屋「橋本書店」・中・（夜）

水野、楽譜の棚に歩いていく。

「あ」の欄を探す。

水野「あった……」

水野、アベマリアの楽譜を手にする。

『はじめてでも弾ける』とタイトルが付いている。

後ろで本を整理する若い店員の女性に、

水野「あの……ドレミってわかります？」

店員「はい？」

○水野のアパート・居間・中（夜）

翔太、弓江のおかずの筑前煮を食べる。

翔太「おいしい！兄ちゃん、ごはん屋さんで

バイトしてるの？」

水野「まあ、な……。あのさ、翔太。お前、

ピアノ持ってる？」

翔太「持ってるよ」

水野「ドって、どこかわかる？」

翔太「兄ちゃん、俺をバカにしてんの？」

×

×

×

電気の消えた居間で翔太が寝ている。

水野、その横で、懐中電灯片手に、ピ

アニカの音を出さずに、ドレミを書き

こんだ楽譜を見ながら右手で「アベマ

リア」の練習をする。

鍵盤のドの位置に『ド』とマジックで書かれている。

○同・玄関前（早朝）

千鳥足の葉子が部屋の鍵を開けて入って行く。

○同・部屋・台所・中（早朝）

水野、顔を洗っている。

千鳥足の葉子が入って来て、冷蔵庫を開け筑前煮を見つけ食べる。

葉子「うまつ！達哉、腕あげたねえ」

水野「店終わるの1時だろ。毎日、朝まで何フラフラやってんだよ」

葉子「色々あんのよう。うまつ！」

葉子、ご機嫌で部屋へ入って行く。

水野、ため息をつく。

思わず、台所の調理台を拳で殴る。

○阿部家・まり亜の部屋・中

眠っているまり亜。

水野、その横で読書する。

まり亜のベッドサイドのテーブルにカ
レンダー。

ホームへ行く日に印がついている。

水野M「あと5日……」

水野、窓の外を見る。

雨が降っている。

○道・ひまわり畑・前

水野、車いすのまり亜を押している。

水野「今日は晴れてよかったね……あの、他
に行きたい所とかある？」

まり亜「明弘……昔、一緒に縁日に行っ

金魚すくいしたこと覚えてるかい？」

水野「あ、……うん」

まり亜「沢山すくえて、大喜びしたね」

水野「そうだったね」

まり亜、水野を見て微笑む。

まり亜、正面を向き、遠くを見つめる。

水野、車椅子を押す。

○阿部家・明弘の部屋・中

アベマリアの楽譜を見て、ピアノで練習している。

所どころ音が出ない鍵盤がある。

○同・2階・廊下

奈央が部屋から出てくる。

鍵盤ハーモニカのたどたどしく小さな音が聞こえてくる。

奈央「まさか、あいつ！」

○同・明弘の部屋・中

奈央が勢いよく入ってくる。

水野、鍵盤ハーモニカと楽譜をベッドに隠し、咄嗟にサッカーボールを持つ。

水野「何だよ、いきなり！か、夏期講習は？」

奈央「今日は休講！なにコソコソやってんの」
水野「別に」

奈央「今、弾いてたでしょ」

水野「弾いてない」

奈央「まさか、いつも弾いてるの？」

水野「弾いてない」

奈央、ベッドのシーツを引きはがす。

楽譜と鍵盤ハーモニカが出てくる。

奈央「弾いてるじゃない！！」

水野「弾いてないって！ってか弾けてないし」

奈央、呆れた表情。

○同・リビング・中（夜）

弓江、酢豚やサラダを入れたタッパを

紙袋に入れている。

水野、やってきて、

水野「おばあちゃんに、おやすみって言って

きます」

頷く弓江の嬉しそうな笑顔。

水野、出て行く。

○水野のアパート・台所（早朝）

水野、チャーハンを作っている。

翔太、ピアノカを弾いている。

玄関の開く音。

葉子が入ってくる。

翔太「母ちゃんおかえり」

葉子「ただいま。あく飲みすぎちゃった」

酔っ払った葉子、冷蔵庫を開け弓江の
作った酢豚を見つける。

葉子、酢豚をつまみながら、

葉子「うまつ！ねえ、またこの前の筑前煮、
あれ作ってよ」

水野「……」

葉子「ねえ、あんたの作った筑前煮よ」

水野「（呟く）俺んじゃねえよ」

葉子「ねえ、筑前煮！聞いてんの？！」

水野、フライパンをコンロに叩きつけ
る。

翔太と葉子、驚く。

水野「いい加減にしろよ！何考えてんだよ！
俺の作った料理の味もわかんなくなっちま

ってさっ！てめえは一生そうやって生きてくつもりかよっ！」

葉子「なによ、急に」

翔太、葉子の前にかばうように立つ。

翔太「母ちゃんのこと『てめえ』って言う

な！母ちゃんは俺たちの母ちゃんだろ！」

水野「…：うんざりだよ」

水野、出ていく。

葉子、力が抜けて座り込む。

翔太、寄り添う。

○阿部家・まり亜の部屋・中

まり亜、ベッドで体を起こしている。

水野、入ってくる。

水野「散歩、行こうか？」

まり亜、微笑んで、頷く。

○散歩道

水野、まり亜の車椅子を押している。

まり亜「明弘、ここへきておくれ」

水野、車椅子を止め、まり亜のほうへ
しゃがみこみ、顔を向ける。

まり亜、水野の顔を両手で包み込む。

まり亜、目をつむる。

水野、困惑の表情。

まり亜、微笑み、手を放す。

まり亜「……縁日の話、覚えてるかい？」

水野「いっばいすくった話……」

まり亜、いたずらそうに笑う。

まり亜「明弘はね、金魚なんてすくえなかつ

たんだ。泣いて泣いて大変だったんだから」

水野、驚いて立ち上がる。

まり亜「ピアノ、あれは奈央が弾いてたね。

あの子の癖はちゃんと耳に入ってる」

水野「いや、あれは俺が」

まり亜「（真顔で）明弘に何があったんだ

い？」

水野「何言ってるんだよ、おばあちゃん」、

まり亜「明弘は、もう……いないんだね」

水野、戸惑う。

まり亜「目は見えなくなっていく。耳も遠く
なっていく。でもね、この手の感覚だけは、
しっかりと残ってるんだよ」

水野、顔を背ける。

まり亜「あたしをなめるんじゃない」

水野「……」

まり亜、水野の手を取る。

まり亜「同じ屋根の下に住んでいれば、どん
なに隠しても察するもんなんだよ。大丈夫。
心の準備はできてるから」

水野、戸惑いながら、

水野「半年前……交通事故で。詳しいことは」

水野、首を横に振る。

まり亜「前の発作で……あたしが入院してた
頃だね」

水野「……」

まり亜「これは、あたしのために仕組んだん
だね？」

水野「……」

まり亜「明弘を亡くして一番悲しいのは、弓

江さんと浩一。あたしの兄が戦争で亡くなった時、母は一生分の涙を流してた。そりゃ、みんな辛い。その中でも一番辛いのは親なのに。なんてバカな子たちなんだろうねえ」

水野「……」

まり亜「……今から依頼主はあたしだね」

水野「え？」

まり亜「あんたはよくやってる。こうやってあたしの散歩道もちゃんと覚えてくれた。あたしが出ていくまでのあと一日。弓江さんと浩一のために、このまま知らないふりをして明弘を演じてやっておくれ」

水野「おばあちゃん……」

まり亜「ダメかい？」

まり亜、真剣な表情で水野をみつめる。

水野「……ダメじゃ、ないです」

まり亜「それからもう一つ」

水野「……あ、はい」

まり亜「笑いなさい。ほんの少しでいい」

水野「……笑う」

まり亜「どんなに辛くたって、笑いなさい。

嘘の笑顔もそのうち、本物の笑顔になるか

ら

水野「……」

まり亜「（粹に）あんたの名前は聞かないよ。

二度と会うことはないだろうからね」

まり亜、自分で車いすを動かす。

水野、慌てて、車いすを押す。

○阿部家・リビング・中

水野、固い表情で入ってくる。

奈央と弓江がお茶を飲んでいる。

阿部、新聞を読んでいる

弓江「どうかしたの？」

水野「いいえ」

弓江、立ち上がり、

弓江「ジュース飲む？」

水野「あの……今日、泊まっていいですか？」

奈央「？」

阿部「（笑って）もちろんだよ！」

弓江、嬉しそうに、

弓江「晩ご飯、何にしようかしらね！」

奈央「……」

水野「あの、晩ご飯、俺が作ります」

奈央「え？」

阿部、弓江、顔を見合わせる。

水野、ぎこちなく笑って出て行く。

○同・2階・襖の部屋・前

水野、襖の前に立ちそつと開ける。

○同・中

水野、遺影の前に座る。

満面の笑みの明弘の遺影。

水野「動かない笑顔見せてんじゃねえよ」

○同・2階・廊下

奈央、襖にもたれて聞いている。

○阿部家・まり亜の部屋・中（夕）

まり亜がベッドで横になっている。

夕日が窓の外に見える。

○同・キッチン（夕）

水野が料理をしている。

弓江と一緒に手伝っている。

阿部が微笑ましく見ている。

奈央、意外といった様子で見ている。

○水野のアパート・居間・中（夜）

葉子、布団を敷いている。

葉子、部屋の隅に置いてあるピアノカ

と「アベマリア」の楽譜を手取る。

葉子「なにこれ？」

歯ブラシを持った翔太やって来る。

翔太「母ちゃん、塩ちょーだい」

葉子、また布団を敷き始め、

葉子「えく？なんで？」

翔太「歯磨き粉がないから。昔はそうしてた

って兄ちゃんが前に言ってた」

葉子「……どっかに買い置きがあるんじゃないの？」

翔太「洗面台の下もなかった」

葉子「母ちゃん、買いに行くよ」

翔太「……兄ちゃん……帰って来ないね」

葉子「……ほっときな」

翔太、寂しそうな表情。

葉子、翔太を横目で見て布団を敷き、

葉子「……今日、母ちゃん、ここで寝ようかな」

翔太「えっ?!」

葉子「何で驚くの」

翔太「だって」

葉子「嫌ならいいよ」

翔太「歯、磨いてくる!」

翔太、慌てて駆け出す。

葉子、照れくさそうに微笑む。

○阿部家・食卓（夜）

水野、阿部、弓江、奈央、まり亜が食卓を囲んでいる。

弓江「おいしいッ」

阿部「ほんとだ」

阿部、弓江が喜んでいる。

奈央もまんざらではない表情。

まり亜、水野を微笑ましく見つめる。

○水野のアパート・居間・中（深夜）

翔太が布団で眠っている。

葉子、横になり翔太の寝顔を見つめて
いる。

葉子、翔太を抱きしめてみる。

翔太、目をつむったまま寝言のように、

翔太「兄ちゃん……暑いよ」

と、葉子の手を振り払う。

葉子、切なそうに見つめる。

○阿部家・明弘の部屋・中（深夜）

水野、ベッドの中で目を開け、天井を

見つめている。

水野、作り笑いと真顔の繰り返し。

水野、起き上がる。

サッカーボールを何気なくもてあそぶ。

○阿部家・リビング・中

陽が差し込んでいる。

○同・玄関・外

ホームの車が道にとまっている。

その横にホームの職員と阿部と弓江の姿。

玄関から奈央がまり亜の車いすを押してくる。

水野、見守る。

まり亜「お別れだね」

水野、頷く。

まり亜、水野の手を握りしめる。

水野「おばあちゃん……」

まり亜、水野に微笑み、頷く。

まり亜と水野、見つめ合う。

奈央、気を遣った様子で、

奈央「おばあちゃん、行くね」

まり亜、頷く。

水野、まり亜の姿を見送る。

水野、咄嗟にリビングに駆け込む。

○同・リビング・中

水野、リビングの窓を開ける。

水野、一瞬戸惑うが、思い切ってピアノを開け、座る。

深呼吸し「アベマリア」を弾き始める。

片手でたどたどしく下手な演奏。

○同・表

家の中から聞こえてくる水野の演奏。

奈央、弓江、阿部、驚く。

まり亜、ゆっくりと顔を上げる。

奈央、慌てて車いすを進めようとする。

まり亜、手でストップをかける。

奈央、阿部、弓江、驚く。

まり亜「聴かせておくれ」

まり亜、微笑みながら聴いている。

弓江、阿部が複雑な表情で立ち尽くす。

奈央はまり亜の顔を伺う。

弓江、阿部、奈央も聴く。

○同・リビング・中

水野、最後4小節を弾き終える。

水野、立ち上がり、窓辺に近づく。

○同・表

窓辺に立っている水野の姿。

阿部、弓江、奈央、それに気が付く。

まり亜が声を上げて笑いだす。

まり亜「恐ろしく下手になったもんだっ！

でも、心のこもったいい音色だった」

奈央「おばあちゃん……」

まり亜、拍手する。

阿部、弓江も思わず笑い拍手する。

水野、驚くが、照れながら笑顔になる。

弓江「……やっと、笑ってくれた」

阿部「そうだな」

奈央「……」

まり亜、微笑んで頷く。

まり亜「（呟く）ありがとう」

職員が手を貸し、まり亜を車に乗せる。

阿部と弓江も同乗する。

奈央を残し、車が出発する。

○同・リビング・中

水野、車を見送る。

○同・明弘の部屋・中

ドアは開いている。

水野、帰り支度をしている。

奈央、入ってくる。

水野、ちらっと奈央を見て、

水野「じゃあな」

奈央「うん」

水野、部屋を出て行きかける。

奈央「ねえっ」

水野、振り返る。

奈央、サッカーボールを水野に投げる。

水野、思わず受ける。

奈央「あげる。それ、お兄ちゃんの誕生日に私がプレゼントしたやつだから」

○中古ゲーム屋「ドラゴン」・店内

水野、店長に一万八千円を渡す。

水野「ご迷惑をおかけしました」

店長、戸惑って、

店長「いや、あのさ、その……もう来ないと
思ってたから」

水野「？」

店長「防犯ビデオ見直したんだけどさ、その
……万引きじゃなかったみたいでさ。申し
訳ないっ」

水野「え？あ……」

店長「高いところに置いてたもんだから、う

っかり落としちゃっただけで、うちの置き方が悪かったんだってカミさんにも怒られちゃてね。だからこれは」

店長、お金を返す。

水野「でも、壊してしまったことは事実ですから」

店長、首を横に振って、

店長「今度は弟さんと一緒にお客で来てよ」

店長、他の客がきて応対する。

水野、頭を下げて店を出る。

その後ろ姿の水野はサッカーボールを持って持っている。

○水野のアパート・部屋・中（夕）

サッカーボールを持った水野が入って来る。

驚く水野、立ち尽くす。

葉子と翔太が台所に立ち、鍋のカレーをかき回している。

翔太「おかえり！兄ちゃん！」

葉子、知らんふりしている。

翔太、サッカーボールに気づき、

翔太「わ、兄ちゃんどうしたの?! これ」

水野「……貰った」

翔太、サッカーボールを受け取り、嬉しそうに転がす。

水野、葉子の背中に向かって、

水野「……食べるのかよ」

葉子「あたしだってこれくらい作れんのだよ」

水野「店は……?」

葉子「休んだっていうか、もう辞めよっかな」

水野・葉子「(同時に) ババアだし」

水野と葉子、鼻で笑う。

水野、居間へ行きかける。

葉子「達哉、……あたし、あんたに甘えすぎてたね」

水野「……いいんじゃないやね、べつに」

葉子「(照れを隠すように) カッコつけ」

水野「……感謝してるよ」

葉子「え?」

水野「たいして呑めない酒飲んで俺たち育ててくれて」

葉子「……あたしは好きで呑んでんのよ」

水野「あ、そう」

葉子「（突っぱねて）そうよ」

水野「……俺さ」

葉子「ん？」

水野「……長生きしてやるよ」

葉子「なにそれ」

水野「なんでもない」

水野、居間に行く。

葉子、水野の背中を見て涙をこらえる。

翔太「母ちゃん！カレーまだ？」

葉子「あ、はいはい！」

葉子、小皿にカレーを入れる。

翔太が味見をする。

翔太「まずっ！」

葉子「うそっ！え、なんで」

翔太「無理っ！」

水野、振り返り、葉子と翔太の様子を

見つめて微笑む。

○ひばり公園前

奈央と友人、自転車で通りかかる。

公園内の翔太に気づく。

奈央、驚いて自転車を止める。

奈央の視線の先、翔太と山口とサッカー

ーをする水野の姿。

友人「どうかした？」

奈央「う、ううん」

奈央の元に、翔太が蹴り損ねたサッカー

ーボールが転がってくる。

水野、ボールを追って走ってくる。

奈央に気がつく。

水野「！」

奈央「何……やってんの」

水野「……サッカー」

翔太と山口も走ってくる。

翔太「お姉ちゃん！」

水野「え？」

奈央「よっ！元気？…」

山口「（翔太に向かって）知り合い？」

翔太「うん」

水野「なんで？」

翔太「ほら、犬は飼い主に似るって教えて

くれたお姉ちゃん」

水野「はあ？！」

奈央、気まずそうに自転車に乗る。

奈央「じゃあ、翔太くんまたね」

翔太「うん、またね、バイバイ」

奈央、友人と去っていく。

○道

奈央、友人と自転車をこぎながら、

奈央「（呟く）お兄ちゃんって、あいつのこ

とだったんだ…」

友人「ねえ、今のだれ？」

奈央「（一瞬考えて）兄貴！」

友人「え？なにっ？聞こえなかった」

自転車を精一杯こぎ出す。

友人「ちよっと待ってよ！」

笑顔の奈央。

○ひばり公園前

翔太、サッカーボールを蹴り、公園内に戻っていく。

水野、奈央の後ろ姿を見つめる。

山口「？」という表情。

翔太の声「早くっ！兄ちゃん！」

山口「誰？さっきの」

水野「えっ？ああ…：妹！」

山口「ふくん。えっ？はっ？え？お前んち何

人兄妹いるの？」

水野、公園内に戻って行く。

山口、追いかける。

○ホーム・まり亜の部屋・中

まり亜、窓の外を見て微笑んでいる。

水野M「俺はずっと正しい家族の形のようなものを探していた気がする」

○ひばり公園・中

水野、翔太、山口、輪になってサッカーをしている。

水野M「でもそんなものはどこにもなかった」
公園に入ってくる小学生1・小学生2
と小学生3がサッカーをしている翔太
を羨ましそうに見ている。

翔太、少し、気にしている。

水野、翔太の様子に気が付き、

水野「翔太、人数多い方が面白くねえ？」

翔太「え……」

山口、微笑んで見守っている。

翔太、小学生1・小学生2・小学生3
に近づき、

翔太「一緒に……やろうよ」

小学生1「いいの？」

翔太「（恥ずかしそうに）うん」

小学生2「やった！」

翔太、小学生1・小学生2・小学生3
笑う。

山口「おーしっ！じゃ、チーム分けするぞ」

水野M「ただ……ほんの少し笑ってれば、
人生の何かが変わる」

水野・山口・翔太・小学生1・小学生
2・小学生3がチーム分けのじゃんけ
んをする。

水野M「今はそう、思えるんだ」

水野の顔に笑顔。

公園の上に広がる青空。